

※ 本コラムは、共同通信社より配信されたものです。

資源、環境に配慮を

富士山や東京五輪

2020年の東京五輪開催が決まって、日本の観光地を訪れる海外の人が増えるとの期待が高まっています。ことし世界文化遺産に登録された富士山にも多くの観光客が訪れることでしょう。

富士登山ではトイレが問題となってきました。排せつ物が環境や景観に与える悪影響が懸念されたからです。でも「バイオトイレ」と呼ばれる環境配慮型のトイレの設置が06年度に完了し、事情が変わってきました。

バイオトイレは排せつ物を微生物の力で分解します。運搬作業が不要で臭いもありません。下水施設がいらず、土や周辺の水を汚さないのも特長です。

バイオトイレを製造しているのは、北海道旭川市の正和(せいわ)電工です。同社は自ら「工場を持たないメーカー」と称し、多くの地元企業が持つ技術や設備を結び付けてバイオトイレを生産します。累計生産数は2013年3月に2300台を超えました。

山小屋だけでなくイベント会場、工事現場でも使われているほか、災害時の利用も想定されています。室内にも設置できるので、介護用としても使えます。

2012年のロンドン五輪では「持続可能性」がキーワードでした。開催準備から施設の建設、運営、さらに大会終了後も含めて施設やインフラを無駄なく使う。こうした考え方を広げることで、世界の環境を守り、資源を息長く使う取り組みにつなげようとしたのです。

東京五輪も「持続可能な社会」を強く意識した運営を目指すべきでしょう。五輪に関与する企業や製品にも環境に配慮する姿勢が求められます。(株式会社グッドバンカー)